

## はえ縄漁業の経営安定化を目指して —アカアマダイ漁獲量の増大、安定化の取組—

江尻釣組合

下野雅己

### 1 地域の概要

私が住む宮津市は、京都府北部に位置し、日本海の若狭湾に面する人口約2万人の市である（図1）。地元には、日本三景の1つである「天橋立」をはじめ、豊かな自然と美しい景観があり、年間260万人が宮津市を訪れる。宮津市の主要産業は観光業であるが、漁業は農業とともに、地域の振興や活性化に重要な役割を果たしている。

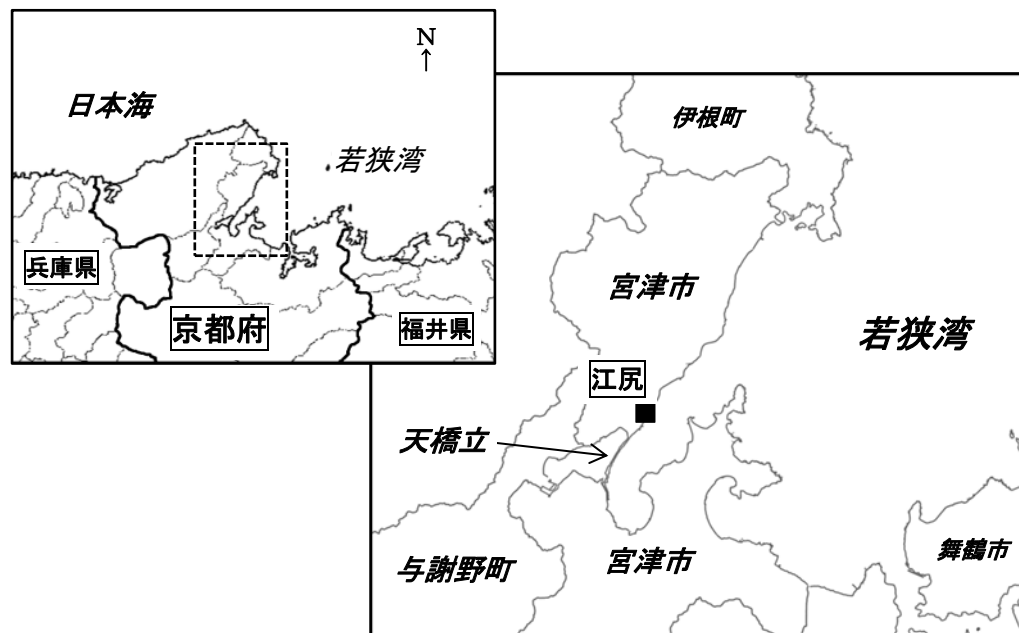


図1 位置図

### 2 漁業の概要

宮津市では、漁協組合員約500人（正組合員約360人、准組合員約140人）により、定置網、一本釣り・はえ縄、桁網、採介藻などの漁業が営まれ、平成27年の年間水揚げ量は約2,800トン、年間水揚げ額は約6億1,500万円である。

はえ縄は、京都府の主要漁業の1つであるが、近年は、漁業者の高齢化等もあり、経営体数の減少が顕著である。また、京都府のはえ縄は、おおむね3トン前後の漁船で1人乗りを基本とする操業が行われている。主な操業場所は若狭湾西部で、過去には、季節によりヒラメ、タチウオ、ハモ等のはえ縄も行われていたが、現在は、アカアマダイのはえ縄が周年営まれている。なお、京都府の近年のアカアマダイ漁獲量は、おおむね25トンから35トンで比較的安定している。

### 3 研究グループの組織と運営

私が所属する江尻釣組合は、釣り・はえ縄漁業技術の改良等を目的として昭和32年1月に発足し、現在に至っている。現在の組合員数は6人で、江尻、日置、文珠の3地区の漁業者で構成され、年齢は40歳代から80歳代と幅広い。なお、50歳以下は、私を含め2人である。

私たちは、他地区のはえ縄漁業者とも連携し、資源管理（月2回の定期休漁、小型魚の再放流）に取り組んでいるとともに、原木魚礁設置事業（写真1）、アカアマダイの種苗放流事業（写真2）に協力するほか、府海域における漁業と遊漁との漁場利用協定の話し合いに参画し、はえ縄が持続的に営めるよう努力している。



写真1 原木魚礁設置作業



写真2 アカアマダイの種苗放流作業  
（漁船への種苗積込と海上での放流作業）

### 4 研究・実践活動の取組課題選定の動機

私は、宮津市日置地区のはえ縄漁師の息子であるが、学校卒業後は漁業に就業せず、地元を離れて大阪府の会社に勤務していた。

そのような中、平成17年1月に父親が病気で倒れたことがきっかけで、家族とともに帰郷することになり、はえ縄漁師になることを決意した。

そして、父のはえ縄漁船（2.8トン、長さ約10m、平成2年進水）（写真3）や漁具を引き継ぐ形で、平成17年12月から、アカアマダイのはえ縄を開始した。

当初は、不慣れで低調な結果であったが、平成19年には、まずまずの水揚げ額を得ることができ、以後も順調に経営できると考えていた。

しかし、その後3年ほど低迷が続き、現状のままでは、不安を抱えながら生活していくことになる、妻や子供のためにも水揚げ額の向上が不可欠であると考え、平成23年から、アカアマダイの漁獲量の増大、安定化によるはえ縄漁業の経営安定化を目指すことにした。



写真3 父から引き継いだはえ縄漁船

## 5 研究・実践活動の状況および成果

### (1) アカアマダイのはえ縄の概要

アカアマダイのはえ縄は、京都府で長年営まれており、漁法の概要や主な操業場所は、図2および図3のとおりである。

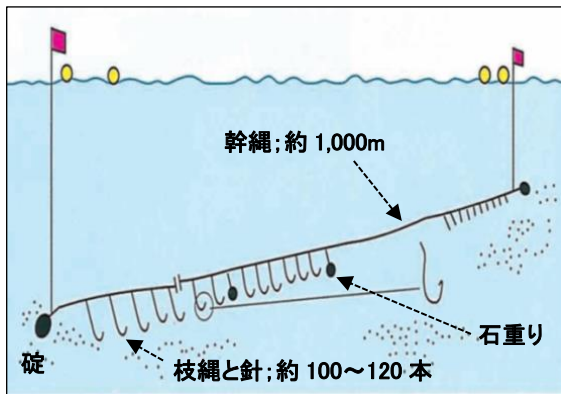


図2 はえ縄漁法概要図

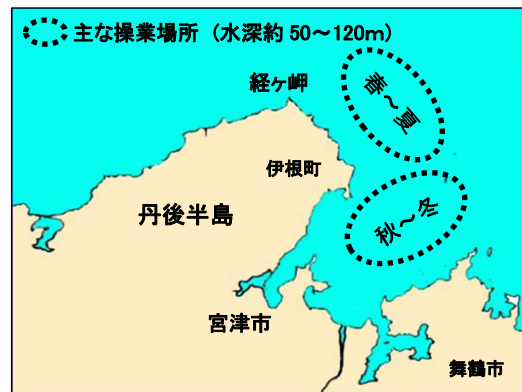


図3 はえ縄の主な操業場所

操業期間は周年で、私は年間約100日から150日出漁している。操業時間は、季節や天候にもよるが、おおむね夜明け前後から昼前までである。漁具は、縄カゴ6個/日程度を使用するとともに、餌は主にエビ（活トラエビ、冷凍オキアミ）とホタルイカ（冷凍）を使用している。

なお、自家用餌料びき網で活トラエビを採捕して行うはえ縄は、京都府の伝統漁法で、地元では「エビ縄」と呼ばれ、私も晩秋から冬（主に12月から2月）に実施している。主な漁獲物は、アカアマダイ、マダイ、キダイなどで、私の場合は、アカアマダイが年間漁獲金額の約8割を占める。

### (2) アカアマダイ漁獲量増大の取り組み

はえ縄漁業の経営安定化に向けては、何より単価の高いアカアマダイ（他漁獲物の概ね3倍以上）を、年間を通じ安定して漁獲していく必要があると考えた。

平成19年から平成22年にかけて、私はアカアマダイを年間約1トンから1.5トン漁獲していたが、これまでの漁獲データも活用しながら、操業方法等を工夫改良することで、アカアマダイ漁獲量の増大は十分実現できると考えた。

また、これまでの操業方法等を見直す中で、漁場の選定、使用する餌などについて工夫改良する必要があると考えた。

私は、地元や近隣地区の漁業者の情報も参考にしながら、自らの操業方法を見直し、できるところから取り組みを実施していくこととした。

具体的には、「好漁場をしっかりと覚える（アカアマダイが巣穴を作る泥場など）」、「季節により漁場と餌を使い分ける（春から夏は水深100m以深の深場で餌はホタルイカ使用、秋から冬は水深70mでの操業を基本とするなど）」、「漁具や操業方法を改良する（針や石重りの付け方の改良、時期によって縄を連結せず複数に分けて投入、また冬は空が明るくなってから縄を投入するなど）」、「毎日の操業結果の記録と振り返りの

励行」などに取り組んだ。特に、日々の操業結果は非常に重要であり、記録の点検を通じて、いつ、どこで、どうすれば良く釣れたか、あるいは釣れなかったかを、次回以降の操業の参考にした。

各種取り組みを行う中で、期待どおりの成果は、すぐには得られなかったが、いろいろと悩みながら取組を続けた結果、平成 24 年から成果が実感できるようになった。

春から夏の伊根町沖の深場（水深 100m 以深）での操業において、平成 24 年春から使用する餌を冷凍オキアミから冷凍ホタルイカに本格的に切り替えたことにより、アカアマダイ漁獲量の増加が実感できるようになった。これに加えて、平成 26 年から、漁場に合った餌を使い分けながら、春から夏は水深 100m 以深、秋から冬は水深 70m を基本として操業を行うようにした結果、アカアマダイの漁獲量がより安定化するようになった。

このほか、私は、アカアマダイの単価が高い冬場に効率よく漁獲していくために、「エビ縄」（活トラエビ操業）を実施している。エビ縄では、夕方から夜に地先の海でエビの曳網作業（2 時間から 3 時間/日、5 回から 10 回/月）を行う必要があるため、労働面の負担が大きい。また、近年、冷凍餌が簡単に入手でき、冷凍餌で十分釣れると言う漁業者も多くなってきたため、現在、府内で「エビ縄」を実施しているはえ縄漁業者は、私を含めてごく少数しかいない。私は、これまでの経験を通じ、水温が低下する冬は、冷凍餌と比べて、活トラエビ操業の方が、アカアマダイの漁獲量が 2 割から 3 割は確実に向上すると実感している。エビ縄も、アカアマダイ漁獲量の増大等に大きく貢献しており、今後も、伝統漁法の「エビ縄」を大事にしながら、アカアマダイを効率的に漁獲していきたいと考えている。

また、アカアマダイ漁獲量の増加を受けて、はえ縄の操業時には、未成熟で単価の安い小型魚（シャリぐじ、全長 20cm 以下）のリリースに努めている。

### (3) ブランド化への対応

私を含むはえ縄漁業者は、漁協と連携し、アカアマダイのブランド化に取り組んでいる。はえ縄で漁獲されるアカアマダイ（300g 以上）は、平成 24 年 3 月に「丹後ぐじ」として、京のブランド製品の認証を受け、以降、ブランド魚の出荷が本格的に実施されている（写真 4）。

「丹後ぐじ」は、漁獲時の丁寧な取り扱い、保管用クーラーボックス内の水温や塩分濃度の管理方法等を定めたマニュアルに基づき生産しているとともに、漁協市場で

は、出荷規格をもとに、銘柄別選別（4 段階）を素早く行い、ブランド魚を専用箱に収容し、中央市場等へ出荷している。

しかし、価格に関しては、低迷しているのが実情であり、私たちは、出荷先（築地魚市場等）へ足を運び（写真 5）、ブランド品の評価等も確認しつつ、漁協と定期的な



写真 4 「丹後ぐじ」とブランドタグ

話し合いを行い、ブランド品の生産増大等に取り組んでいるところである。

築地魚市場関係者からは、「丹後ぐじ」について、関西系の料理人を抱える料理屋等からの引き合いが強いとともに、魚の味の評価も高いため、自信を持って生産に取り組んでほしいと意見をいただいている。

また、京都市中央卸売市場や漁協と連携して、京都市内の消費者を対象とした料理教室に参加するなど、「丹後ぐじ」のPRにも努めている（写真6）。



写真5 築地魚市場関係者との懇談



写真6 京都市の料理教室での「丹後ぐじ」PR

#### (4) 成果

##### ①アカアマダイの年間漁獲量等

アカアマダイの年間漁獲量と1日当たり平均漁獲金額は図4のとおりで、ともに増加傾向にある。年間漁獲量は、過去4年の平均値と比較して、平成23年以降は約1.5倍に増加した。平成26年は、家庭の事情で、長期間出漁できず減少したが、平成27年は順調に操業することができ、過去最高の約2.6トンを漁獲することができた。

1日当たり平均漁獲金額については、平成23年以降は3万円以上を確保できるようになった。平成27年は、特に単価が高い冬場の漁獲量が多かったため、過去最高の5万円以上を達成することができた。

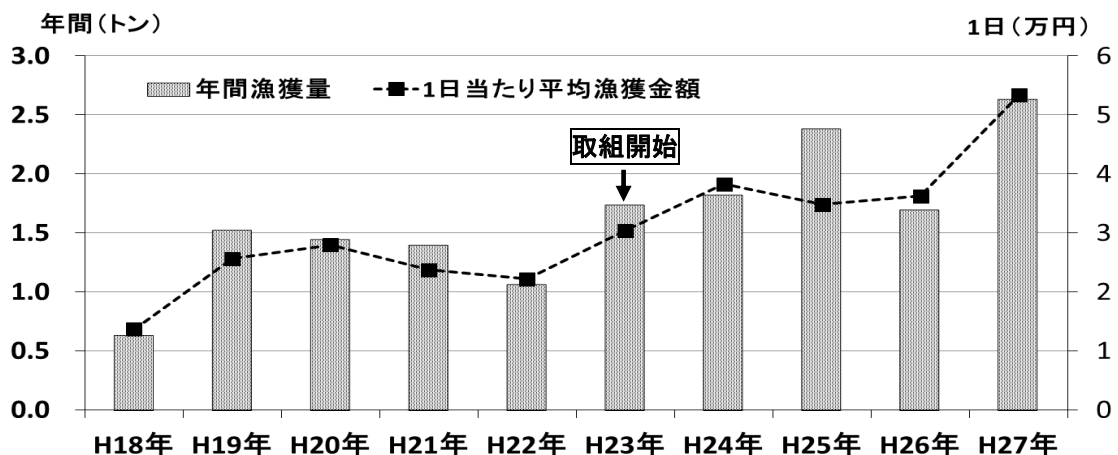


図4 アカアマダイの年間漁獲量と1日当たり平均漁獲金額の推移

アカアマダイの月別漁獲量（「平成19年から平成22年」と「平成23年から平成27年」の平均値比較）は図5のとおりで、8月から10月の漁獲量は同程度であるが、1月から7月までと、11月、12月の漁獲量は確実に増加した。

これらは主に、春から夏の深場での冷凍ホタルイカ使用による操業、晩秋から冬に行うエビ縄操業による成果であると考えている。

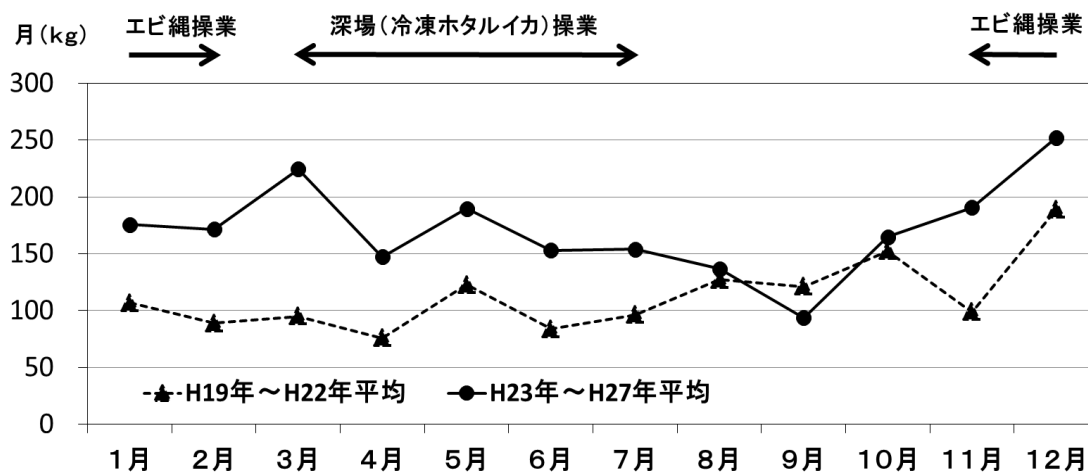


図5 アカアマダイの月別漁獲量（「平成19年から平成22年」と「平成23年から平成27年」）の平均値比較

## ②はえ縄の年間漁獲金額

私のはえ縄漁業は、順調にスタートしたが、平成20年から平成22年にかけて低迷が続いた。平成23年からアカアマダイの漁獲量増大に向け各種努力した結果、図6のとおり、平成24年以降は、年間漁獲金額500万円以上を確保できるようになったとともに、平成27年は順調に操業することができ、過去最高の約740万円となった。

平成28年も、前年とおおむね同程度という状況である。

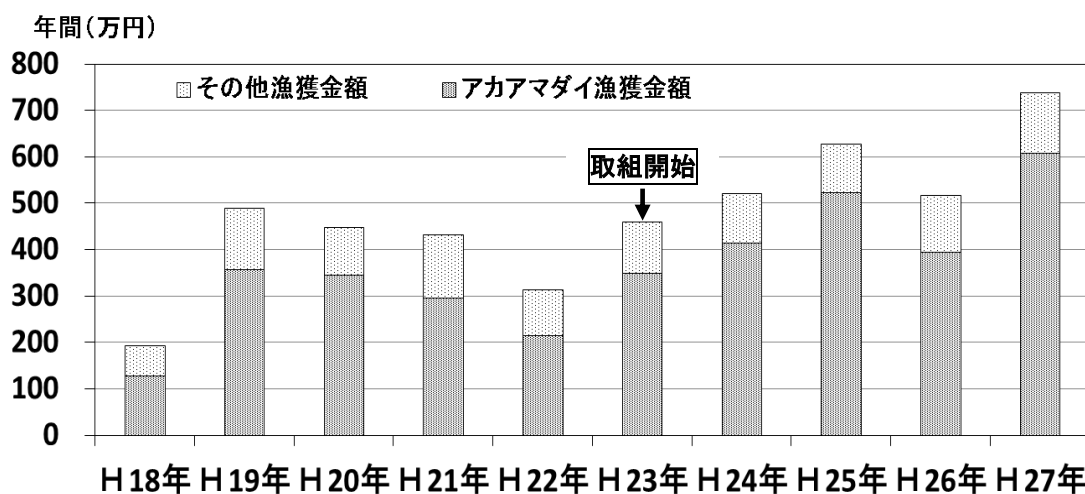


図6 はえ縄の年間漁獲金額の推移

経営面に関して、主な費用は漁船修繕費、燃料費、漁具費等、餌・氷・箱代、販売手数料で、このほか減価償却費などを含めた漁業経費は、年間漁獲金額の5割前後という状況である。

私は、はえ縄の漁獲量が低下する夏に、近場の宮津湾で操業する「天然とり貝（橋立とり貝）」の桁網漁も行い、良い年には約80万円を水揚げし、漁業収入の向上に努めている。

平成23年から、試行錯誤しながら各種取り組みを続け、アカアマダイの漁獲量の増大、安定化を実現することができ満足している。はえ縄漁業の漁獲金額が向上したことにより、以前に比べて、少し余裕をもって経営、生活できるようになった。

個人的には、これまでの取り組みを通じて、京都府の若狭湾西部でアカアマダイを円滑かつ効果的に周年漁獲する操業方法を一定確立できたと考えている。

## 6 波及効果

私は、府内の釣り・はえ縄漁業者にアカアマダイのはえ縄で実績を上げていることが認められ、京都府の釣漁業連合会の代表を平成26年から務めている。

私を含め府内のはえ縄漁業者が生産するブランド品「丹後ぐじ」が広く知られるようになったとともに、外部から京都府の漁村へ移住し、丹後ぐじを漁獲するはえ縄漁師を目指す者も出てきた。

また、普及指導員から、はえ縄の新規参入者や漁師希望者に対する指導依頼がくるようになり、エビ縄を行うための自家用餌料びき網の体験乗船をはじめ、はえ縄の漁具づくりや乗船実習で指導しているところである。

## 7 今後の課題や計画と問題点

現在、京都府海域のアカアマダイの漁獲状況は比較的安定しているが、今後とも、アカアマダイのはえ縄が持続的に営めるよう、他地区漁業者と連携して、資源管理や原木魚礁設置等にしっかり取り組むとともに、はえ縄の水揚げ額の向上に向けて、操業方法など、さらなる工夫改良に努めていく。

また、今後とも伝統漁法の「エビ縄」を継続するとともに、京都府の貴重な漁法として、次代へ引継ぐ取り組みも行っていきたいと考えている。

最後に、京都府において、「はえ縄漁業」を未来に存続させていくためには、何より、後継者育成が必要である。京都府では、平成27年から、漁業団体（漁協等）と行政（府、市町）が連携して共同運営する「海の民学舎」による漁業の担い手育成の取り組みが開始されており、府内の漁村への定住を目指し、はえ縄漁師として本気で頑張っていく気概を持った若者に対し、私も全力で支援していきたい。